

氏名 吉田ゆり子

本論文は16世紀から17世紀にかけての日本の中世・近世移行期を対象にして、兵農分離を軸とした社会変動を、国人と侍衆という二つの中間層の差異に留意しながら、地域社会の在り方に沿って考察を試みたものである。全体は、従来の研究の整理と問題点の指摘をした序論に続いて、三つの編と補論とからなる。

第一編の「国人領主と狛野荘」は、南山城の狛野荘を基盤とした国人領主狛野氏と侍衆を素材に、惣村との関係について考察している。第一章では、侍中と百姓中という階層区分に着目し、狛氏の旧臣である侍衆（狛連中）が百姓中の台頭にあってどう動いたのかを追う。第二章は、上狛村が16世紀から17世紀にかけて村落としてどのように展開していったのかを、太閤検地帳や、村の四つの株への分化の状況、新たに突出した存在となる浅田氏の動向などの分析から検討する。第三章は、狛氏が17世紀の後半に織田家の家臣となって上狛を離れた後も、狛連中との関係を幕末まで維持したことの意味とその意識とを明らかにし、最後の第四章では、京都町奉行所が山城一国で実施した帯刀改めを取り上げ、在方の浪人・郷侍・帯刀人の区別や無足人の性格を明らかにしている。

これらは新たに国人や土豪・地侍を弁別した上で、中世・近世移行期の地域社会の変化を捉えた点で大きな意義が認められる。

第二編の「地侍と上神谷」は、和泉国大鳥郡上神谷を素材として兵農分離による在地社会の変動を検討している。16世紀の小谷氏は国人領主のもとで谷の年寄衆（地侍）の一員に過ぎなかったが、太閤検地の村切りを経て上神谷13ヶ村が成立すると、山代官に任じられて宮座の主導権を握り、17世紀には急成長を遂げたことを明らかにした。

これまで小谷氏を大庄屋などの中間的な支配機構と同列に見ていた通説を批判し、その性格を明快に示した点で貴重な成果である。

第三編の「土豪と伊那谷」は、信濃国下伊那郡虎岩村を素材にして、畿内の惣村型とは異なる地域における社会変動を検討する。最初に戦国初期の土地台帳、徳川家康による天正検地などの分析によって、土地所有と知行制の在り方を探り、これらが兵農分離によってどう変化していたのかを考察し、旧土豪層が在地社会における支配の末端に位置づけられてゆく様相を明らかにしている。次に17世紀の虎岩村の社会構造の分析から、年貢請負システムの変化を明らかにし、最後の補論では、虎岩村の役屋が、年貢負担者のうちでも百姓役を勤める者に限定されていたことについて論じる。

このように本論文は、従来その重要性が認識されていながらも十分取り組まれてこなかった課題に対して、山城・和泉・信濃の三つの地域を素材にして分析し、精緻な実証研究を行ったものと指摘できる。また中間層については、その具体的な内容や差異に注意を払わずに一括して「小領主」として論じてきたこれまでの動向を批判し、国人と土豪・地侍とを弁別して地域社会の変化を跡づけた点で意義が認められる。さらに在地社会においても侍・武士意識が社会的結合に大きな構成要因となっている事実を解明した点は、今後の身分制研究などに重要な論点を提供している。

ただ村落論や中間層論などについての理論的な見通しがやや欠けることから、全体の動きが今一つ明らかではないという問題点は残るが、それらは今後の課題として、本審査委員会では上記の顕著な成果に鑑み、本論文が博士（文学）にふさわしいものとの結論に達した。